

TRUTH and some fakes

Eトッドさん研究の軌跡

家族システムとイデオロギーの相関を発見

外婚性共同体家族分布図と共産圏地図の重なり合いを契機に各地域の家族システムと政治的・経済的イデオロギーの相関関係を解明。人類学的分析を先進国に適用した画期的業績。「リベラル・デモクラシーは英仏の核家族システムの反映であり、理性による進歩の産物ではない」

近代化モデルの解明

歴史学理論（識字化と政治的民主化の関連性 英歴史学者L. ストーン）と人口学理論（人口転換等）をもとに、教育の進展を基礎とした近代化モデルを構築。ナチスによるユダヤ人虐殺や日本の軍国主義その他の暴力を移行期危機とする解釈も。

家族システムの起源

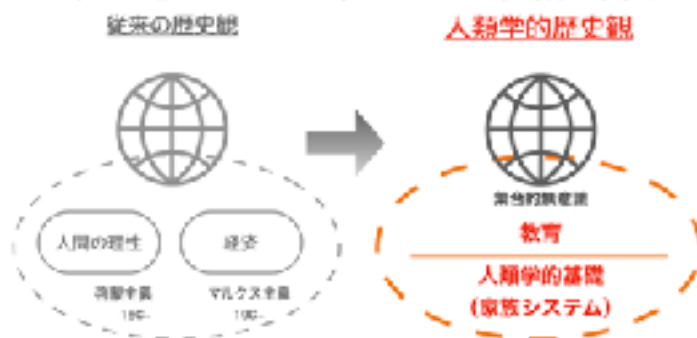
家族システムの変遷を追い、人類が核家族（自由・両性の平等）から直系家族（権威・女性の地位低下）、共同体家族（権威・女性の地位最低）等に「進歩」かつ多様化したことを明らかに。「人類は近代化で「接近」するが「収斂」はしない」



歴史の「人類学的基礎」 解明 「マルクス後」初の快挙

21世紀になってもテロや内戦や虐殺、人種差別や性差別すらなくならないのはなぜか。現在「自由で民主的」でない国々は今後どうなっていくのか。資本主義の発展が格差を生み出すのは必然なのか。社会にとって本質的なこれらの問いに答える糸口がついに発見された。エマニュエル・トッドさんは、歴史の動きに根源的な影響を与えているのは、「人間の理性」（啓蒙思想）でも「経済」（マルクス主義）でもなく、家族システム（人類学的基礎）と教育の

歴史を動かすものは何か？：歴史観の変遷



内戦や虐殺はなぜ起こる？（移行期危機）

教育の進展による社会の急激な近代化は心性を攪乱し「移行期危機」を引き起こすという。「フランス革命、ロシア革命の大粛清もホロコーストも移行期の現象でした。先進国は中東やミャンマーの暴虐を非難しますが、過去に類似の現象を経験していない国はありません。彼らは野蛮なのではなく現在その時期を迎えているだけなのです。私たちは寛容を身につけ、「制裁」以外のより効果的な支援策を考える必要があります」

日本への示唆は？

トッドさんは「日本は文句なしの先進国」だが価値観における貢献は不十分だと指摘する。「共同体家族の集団主義は核家族には恐怖の対象だが日本人には理解できるはずです。」「日本は米国の粗暴な経済自由主義、傲慢な西欧中心主義に抑制を求めることができる立場にあります。「西欧の控えめな一員」という位置付けは謙遜というより誤り。それも自国民を不当な文化的圧力に晒し、多様な国々の平和的共存の可能性を損なう、極めて有害な誤りです。」

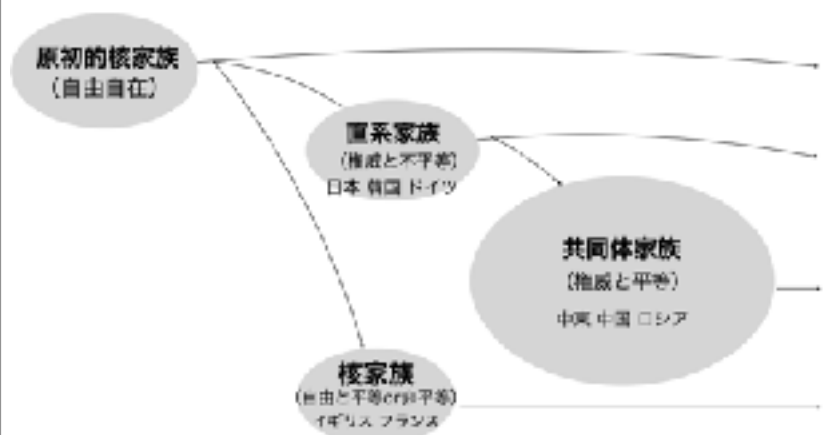
未来に希望はあるのか

「民主主義と産業革命の基盤は識字率の上昇による「平等な社会参画」の心性でした。現在の顕著な「格差」は、高等教育の進展による「差異化」「不平等」心性の産物。とはいえ、平等な初等教育という基盤が損なわれたわけではないし、世界の識字率は100年以内に100%に達するはず。希望を失う理由がありません。」

進展状況が規定する社会のメンタリティ（集合的無意識）であることを明らかにした。（写真 Oestani @wikimediacommons）

専門家「ノーベル平和賞に値する」

この理論によれば、人間の社会の基礎には家族システム（人間同士のつなぎ方を定義する基本ソフトのようなもの）があり、現生人類の誕生から以下のように展開した。このシステムが社会の基本的な価値体系を規定している。システムは可変的だが時間軸は1000年単位であり、一朝一夕の変化は想定できない。



家族システムは文明の中心地であった中東や中国で最も発達し、周縁的な地域でより原始的な形態が残存した。しかし原始性に由来する活力のゆえに核家族地域から近代化が始動する。社会の進歩は教育の進展によるものであり、近代化の場合その契機はプロテスタント宗教改革であったという。

識字率（男性）	政治体制
0-5%	神権政治
5-50%	封建制等の官僚政治
50-100%	民主主義

政治の民主化や産業の発展を中心とする近代化は家族システムに関わらず識字率の上昇によって達成される。しかし成立する社会の形は異なり、核家族以外の「近代」はイギリスなどより自由主義の色彩が薄くなるという。専門家は「文化的相違や発展の速度を倫理や優劣と無関係に説明し尽くす画期的な理論。1000年単位という家族システムの変遷速度とその影響力の大きさは、拙速な進歩の強要を戒め、寛容が必然的であることを人類に教えるものだ。ノーベル平和賞に値すると思う」と語る。